

2020年度鳴門市人権地域フォーラム

テーマ 「ひとつと」から「わがこと」へ

～自己をみつめ、語り、人と人がつながる人権学習～

■と き 2020年8月21日(金)13:30～15:30

■ところ 鳴門うずしお会館

コーディネーター A (T-over人権教育研究所共同代表)

パネリスト B (T-over人権教育研究所共同代表)

C (1991年度板野中学校卒業生)

D (1996年度板野中学校卒業生)

《司会者》

(壇上に登壇者はすでに上がって席に着き、マスク着用の各席の間には新型コロナウイルス感染症対策としての透明フィルムシートの壁が設けられている)

それでは、本日お招きいたしました講師の方々をご紹介します。

(司会者から紹介のあるたびに紹介された登壇者が立ち上がりあいさつし、会場から拍手が起こる)

向かって左から、本日のフォーラムのコーディネーターを務めていただきます、T-over人権教育研究所共同代表のAさんです。続きまして、パネリストの方々をご紹介します。T-over人権教育研究所共同代表のBさんです。1996年度板野中学校卒業生・臨床心理士のDさんです。それでは、以後の進行につきまして、Aさんよろしくお祈りします。

《コーディネーター A》

(いっぱいの笑顔で)皆さん、こんにちは。マスクをしての話になりますので、だいぶ声がこもってきます。(切々と)本当に大変な中での日々の生活があります。学校現場でこういった形で授業をするわけですけど、本当に子どもたちの一生懸命頑張っている姿に、癒され励まされる毎日です。

学校へ行く以外、他のところへ移動するということがないような生活です。学校という場が私自身を癒してくれる場所になります。現在私は、松茂中学校で4年目を迎えています。(しみじみと)後でまた話をさせてくださいけど、本年度から松茂中学校はチーム担任制ということで、3年生の学級担任をしています。4クラスあって、同じように道徳の授業をします。その時間が本当に私の生きがいとなって、よろこびとなってきます。

資料の中に、「スダチの苗木」の授業の感想を入れさせてもらっています。本当に子どもに励まされます。昨年度、2020年2月に2020年度からチーム担任制を実施することになり、学年の4クラスで道徳授業も同一歩調で積み上げていくということで、4クラスで同様に「スダチの苗木」の道徳授業をしました。

その授業では、私自身をさらけ出していきます。それはやっぱり、今日のテーマにある板野中学校で学んだ本心を語り合う部落問題学習がベースにあります。その授業での私の語りを聞いた子どもたちが、それまで誰にも言ったことのない思いや願いを綴ってきました。

ずっと心に秘めてきた自分の病気のことであったり、家族のことであったり、友だちのことであったり、その授業から子どもの姿が本当に変わっていきました。その授業の冒頭で語った板野中学校時代の私の思いに寄せて綴ってきた生徒の感想を紹介します。この感想は、本日の要項の中に入っています。この文章を書いてくれた生徒本人が、朗読をしてくれた声を聴いてもらいたいと思います。

【音声】

2020年2月20日(木)

板野中学校の部落問題学習に学ぶ道徳学習 ～道徳授業「スダチの苗木」から学んだこと～

松茂中学校2年

「スダチの苗木」についての授業の中で、僕の心に一番残っている言葉は、「生まれは変えられないが、生き方は変えられる」という言葉です。僕は、中学校になって、同和問題についての学習をするまで、そういう地区があるんだなという程度の認識でした。

しかし、徳島にもそのような問題を抱えた地区があり、A先生はその問題に向き合い、その地区の生まれであることを卑屈にとらえる子がいなくなるようにと願いながら、教師として活動したことを知って、同和問題が自分たちに身近な問題であることを知ると同時に、A先生をすごいと思いました。

僕なら、その地区の出身であることを隠しながら、そのことを気づかれないかとおびえながら生活していただろうと思うからです。それを、A先生は、家庭訪問の時、同和地区の子どもと自分の子が仲良くなるのを心配した親に、自分も同和地区の出身だと言ったそうなので、すぐく勇気のある行動だと思いました。

そして、その後も、多くの学校で同和問題の授業を行い、たくさんの人を救っているんだろうなと思いました。生まれた場所を選ぶことはできないが、自分が周りの人の意識を変えることで、多くの人を救うという生き方を選んだA先生は、その考えに共感した多くの人々の人生を大きく変えたんだろうなと思いました。

道徳資料「スダチの苗木」(森口健司)「文部科学省道徳教育読み物資料とその利用4」

(じっくりと)板野中学校の話に今からなっていくます。1990年に板野中学校に赴任した折、部落差別の中であえぐ子どもたちの思いに出会っていきます。そのことが子どもたちの本心を語る人権学習になっていきます。

今回パネリストをお願いしていたんですけど、ちょうど赴任したその年に出会ったC君。今回、新型コロナウイルス感染症が広がっている中で、奥さんの職場の関係で、家族が100人以上が集まるイベントに参加することは自粛してほしいということで、今回はこの場に参加できないということで、昨晚原稿を送ってくれました。その原稿を代読させてもらってC君の報告に変えたいと思います。

C君は、板野中学校で全体学習がスタートした1990年度、彼が中学2年の時に出会った生徒で、その翌年度、中学3年生の時に私が担任した生徒です。中学3年の時には、クラスのリーダーとして、郡同研、全道研、県中同研という3回の公開授業で、自分自身の精一杯の思いを語ってくれた生徒です。

1996年の鳴門市人権地域フォーラムでも、パネリストを務めてもらい、自らが直面してきた結婚差別について語ってくれました。今回は、3人の子どもの親としての思いを記してくれています。それでは朗読します。

《パネリスト予定者 Cさんの原稿代読》

僕には、子どもが3人います。一番上の子が、今年9歳になりました。この子が生まれた9年前と比べて、人権問題、特に、同和問題について何か変わったのか、よくわかっていません。

昭和から平成、それから令和になってもこの問題は存在しています。僕の母親、おばあちゃんもこの問題に苦しめられ、僕の父親は、このことについて何も話をしないまま亡くなってしまいました。

僕は、学習会に通っていましたが、中学校3年生まで、自分が地区出身ということを知りませんでした。僕が、中学校2年生の時に全体学習が始まりました。このフォーラムのチラシにある全体学習です。始まったところは、発表するクラスではなかったのですが、中央のクラスではなく、その周りといいますか。外に席を置いてその様子を見ているクラスでした。中央のクラスの発表が終わると、それに刺激され周りのクラスも意見をだしていたように思います。もうだいたいおじさんになったので、記憶もおぼろげですが…。

もし、この中学2年生の状態で大人数にならなければ、今の自分があるかどうかわかりません。その頃の自分は、同和問題というものが分かってなかったし、実際に、親やその周りから何も聞いていませんでした。子どもから中学、高校へと進むにつれ、自分の家と他の家では違うことをなんとなく感じ取ります。それから、大人になり、現実はこの問題が自分に直接関係してくることが感じ取れました。まずは、就職活動。それから、結婚の問題。結婚は、直接自分に重くのしかかってきますし、相手の家族にもかかわってくる厄介な問題です。

ちょっと目をつむって想像してみてください。

自分が20代や30代で結婚を意識し始めた頃とします。

彼女や彼の家で、手を伸ばしたら相手が届きそうな距離で楽しい話をしていたとします。

そこから、自分にこう質問されます。

私のおじいちゃんはおっちのひと(地区の人)とは絶対反対やけど、あなた(ひろし)はおっちのひとと違うよな?って。僕は、心臓がどきどきしました。あなたはどのように答えますでしょうか。

自分は、地区と関係ないから、違うよと普通に言える。

自分は、地区出身だと別れたくないから違うよって言う。

それとも地区出身だと、本当のことを話す。どうでしょうか。

この鳴門市人権地域フォーラムでお話を何度か聴かせていただく機会がありました。そこで、僕たちが学んだ全体学習が行われていて絆が続いているんだなあ、すごいなあと思いました。

それとは、逆に、やりにくい環境になり、途絶えてしまったなどのお話も聞きました。自分たちの意見をぶつけ合うことができ、この多感で成長期である時に人権学習をすることで大きく成長することができると思っています。

今でも僕の中で残っている全体学習のイメージは、自分の心の中の弱い部分と強くにぎる拳、伝えたくても声や体が震えてしまい十分に言えない自分。絞り出して思いを伝えた言葉。そんな全体学習であったように思います。

一人一人の心の中にこれが差別なのかもしれない、これは、おかしいと思えること。自分が言った言葉や家族が言った言葉が、その言葉が相手の心を傷つけたとわかることって大切なことではないでしょうか。また、その思ったことを相手に理解してもらうのはさらに大切なことです。

自分の話に戻りますが、中学3年になり、その家庭訪問で担任からお前は、部落の出身なんぞと言われました。家庭訪問に来てすぐに言われました。当時の気持ちは、もうおじさんなので忘れてしまいましたが、その時は涙がこぼれました。隣の母親も涙を流していました。その涙は、この部屋の緊張感からか、母親の涙をみて涙が流れたのか、自分が差別される側ということに突き付けられてショックだったのか、それとも自分の中に眠っていた差別心だったのか。今となっては、この経験がスタートとなりました。

僕は、中学3年生からスタートし、先生、仲間、先輩たちのおかげでいろいろな体験をさせていただきました。僕が30代の時「おっちのひと?」と聞いたのは、当時の彼女で、今の妻となります。僕は、正直に答えました。全体学習や今までの体験から、逃げないで真正面に取り組むことに決めました。

彼女も僕を兄弟や親に会わせたり、おじいちゃんのところ連れて行ったりと大変な思いをしながら2人で会いにいきました。微力ながらお手伝いにもいきました。大変なことばかりで、僕も彼女も悩み、家族や先輩、先生などいろいろな相談をしました。ひとつひとつ峠を越えることができ、結婚、それから子どもも授かることができました。

物語なら、ここでハッピーエンド、めでたし、めでたしで終わるところですが、ここで終わらないのが同和問題です。

僕は、こうして幸運にも結婚し、子どもが生まれました。慌ただしい毎日ですが、幸せに暮らしています。ただ、年を重ねるうちに、うちの子どもの数も数年もすれば、僕と同じ辛い思いをしなければならないのかと思

うと深いため息が出ます。僕が、何か悪いことをしたわけでもなく、当然子どもも何もしていませんが、どちらかの親が地区出身者であるというだけで、この理不尽な差別を受けなくてはなりません。

うちの子どもたちが事実を知り、これからの人生を幸せに送れるのだろうか？差別に負けない心と冷静になって話し合える知識と経験をつんでいけるのだろうか。家での話し合いや教育の大切さは知っていますが、それだけではどうにもなりません。

差別する側と差別される側が純粋に意見を交換できる場所が必要であるし、その意見交換があったあとには、フォローや心のケアも必要でしょう。この場が、差別される側を見つけて差別させる場になってはいけません。

僕もそうですが、自分の心を強くする、経験を積むというのは、積み重ねが必要で、時間がかかります。この場にいらっしゃる先生方、職員の皆様もそのように思っていると思います。

是非とも、純粋に言い合える機会や仲間づくりをひとつひとつ地道に継続いただけたらと思っています。また、自分もどうしないといけないのかと自問自答しながら、道を進んでいきたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。

《コーディネーターA》

実は、昨日の夕方電話がかかってきました。「先生、原稿を仕上げたので送ります。」ということでした。「今、職場におりますので家に帰ってから送ります。」ということで、昨晚送られてきたのは9時50分です。この原稿を読んでから頭が冴えて、なかなか眠れませんでした。

彼と過ごした中学2年と中学3年。特に中学3年の時のことがずっとよみがえったんです。彼は当時、私が担任する3年B組の副委員長を務めていました。要項をご覧ください。

要項に資料を挟んでいます。彼とは中学3年の時、3つの研究大会で公開授業をしています。一つは、1991年6月25日に開催した第35回板野郡同和教育研究会公開授業《主題「誇りうる生き方を求めて」資料「同和教育への希い」(丸岡忠雄)》です。

その授業で、同和地区の子どもたちが部落出身という立場を次々に語っていきました。その仲間の語りに寄せて、彼は、家庭訪問と時、初めて自分が部落出身であるということを知って、自分の中にあった差別意識を深く認識したことを語りました。

そして、平成3年10月31日(木)に実施した第25回全日本中学校道徳教育研究会徳島大会特別公開授業《主題「生きる絆」資料「サイン」(井上ひさし)》です。

この授業の中で、彼は、クラスの仲間が、同和教育の重要性について語る発言に寄せて、「人間の生き方を求める道徳教育と同和教育のつながり」について語っていきます。この授業がきっかけとなって、私は、当時の文部省(現文部科学省)の「道徳教育読み物資料作成協力者会議」の委員となり、「スダチの苗木」という、私自身の生い立ちをまとめた資料。そして、結婚差別のことをまとめた「峠」という資料を、中学生の道徳読み物資料として著すようになります。彼は、そのきっかけとなった重要な訴えをしたクラスのリーダーでした。

そして、1991年11月19日、3年B組の同和教育の集大成として取り組んだ第21回徳島県中学校同和教育研究会公開授業《主題「誇りうる生き方を求めて」資料「水平社宣言讃歌」(西口敏夫)》です。

この授業は、私はほとんどしゃべっていません。子どもに問いかけ問いかけ、「次」「次」「次」と促すだけで、生徒の語りが次から次へとつながっていった授業です。この授業の中で、それまで一度も発言したことのない1人の女子生徒が手を挙げました。

その女子生徒は、中学3年の家庭訪問の時に、お父さんとお母さんが迎えてくれた生徒です。その生徒は、当時の学習会にも参加していませんでしたので、その生徒が部落出身であることを私は全く知りませんでした。家庭訪問の場で、お父さんとお母さんが「先生、実は…」と切り出されました。

ご両親共に部落の出身だと言われました。そして、2人とも本当に厳しい差別にあってきたことを私に告げると共に、この家庭訪問で、私を交えて、親子で部落問題の話をさせてほしいということでした。

この家庭訪問で、その女子生徒は、部落出身という立場を知ると共に、両親の思いを受け止め、両親の思いをしっかりと受け継いでいくきっかけとなっていました。その女子生徒が、第21回徳島県中学校同和教育研究大会公開授業で、ずっと心に秘めてきた思いを吐き出すように、ゆっくりゆっくり語った言葉が、その資料の中にあります。

「部落問題を学んできて私は変わったと思います。1年生の時にお母さんとかお父さんの前で部落問題の話をした時、お父さんもお母さんもとても辛そうな顔をしたから、もうこのことは絶対口にしないと決めていたけど、この頃だったら、お母さんとかお父さんの方から部落問題のことを話し掛けてきてくれるようになりました。私は、部落問題の学習は人間の本当の生き方をつかんでいく学習だと思います。」

中学1年の時、学校で部落問題の勉強をした時に、素直で真っ直ぐな生徒ですから、親に勉強をしたことを伝えたんです。そのときに、両親が本当に辛い顔をした。それから絶対に家では部落問題の話はしないということを彼女は決めたんです。でも、ずっと自分の中で抱え込んだことが生き生きと表現する自分に変わっていきます。そして、彼女は、この公開授業の日の生活ノートに「涙」という詩を記してきました。両親への思いと、彼女の強い決意のこもった詩「涙」です。松茂中学校の生徒に朗読してもらった、その音声を聞いてもらいます。

「涙」

部落という言葉聞いて

心が重たくなるのはなぜだろう

悲しくなるのはなぜだろう

この差別のために何人の人が苦しみ

何人の人が涙を流しただろうか

そうして何人の人が自らの生命を絶っただろうか

私は部落をつくった人

また部落を差別するすべての人を

決して許さない

私たちが流した涙は

いつか川をつくるだろう

そして部落差別と大きな悲しみを

水といっしょに流してくれるだろう

どこかへ消えてしまうだろう

私は解放の主体者として闘い続ける

部落差別解消の日まで

彼女は、凛として自分と向き合っていく姿が変わっていきます。C君もこの公開授業で何度も語りました。

涙も出ました。その語りに寄り添うように、この公開授業を参観した先生方がC君に声をかけています。そのことが、この公開授業の日に綴った生活ノートに綴られています。その文章には、「希望のゴールへ」という題が書かれていました。この文章も、松茂中学校の仲間が朗読してくれました。聴いてください。

【音声】

希望のゴールへ

部落問題学習でつかんだもの、それは3年B組という固い団結の絆だと思う。

一人一人の悲しみが怒りとなって語り合い、そして支え合っている。

公開授業が終わったとき、男の先生が僕のところにきて、「頑張ったなあ」と言ってくれた。

僕はものすごくうれしかった。発表して本当によかったと思った。

この先生だけでなくほとんどの先生たちが、この学習の大切さをわかってくれたと思う。

この3年B組で、この3年生で、そしてこの板野中学校で燃やしたこの炎を、

多くの先生たちが、また誰かにつないでくれたらと思う。

自分の思いを語っていくことによって、自分という人間が変わったと思う。

2年生に比べて明るくなったと思うし、物事をよく見るようになった。

そして、朝がさわやかに感じられ、人の優しさというものが見えてきたと思う。

今日帰るときコスモスの花が、太陽に照らされていた。

まるで僕に勇気をくれているような気がした。

過去を背負うのではなく未来に希望を持ちながら、頑張っていきたいと思う。

これからも悲しさではなくうれしさで、そして嘆くよりもいかる気持ちで、

これからも峠を越えていきたいと思う。

支え支えられてこれからも、自分というものを見つめて頑張っていこうと思う。

今日帰るとき、女の先生から声をかけられた。

「授業、感動しました」と言ってくれた。

僕は「学校に帰ってからも同和教育頑張ってください」と言った。

後でもっといろいろな話をしたらよかったと思った。

でも多くの人の心が動いてくれたことがうれしい。

こうしてくれる人たちは学校に帰っても頑張ってくれると思う。

僕も人任せにならないように頑張っていくつもりです。

果てしない、そして長い道のりをこれからも光をたっぷり浴び、

空気を思いきり吸って、仲間と共に歩み、足踏みすることがあっても、

弱音を吐かず、希望のゴールへと進む。

(1991年11月19日 板野中学校3年B組 第21回徳島県中学校同和教育研究大会公開授業)

私は思っています。子どもたちと語り合う部落問題学習は、まさに部落差別をなくしていく闘いであるということです。そういう人権学習を積み上げていきたいと思えます。その学習の原点は、板野中学校の全体

学習です。C君の学年が卒業した後、全体学習が学校全体の取り組みになっていきました。

そして、1994年に徳島県で第46回全国同和教育研究大会が行われたとき、私は板野中学校で1年生を担当したんですけど、その当時、板野町の小学校にも、しっかりと同和教育に取り組んでいく体制ができていました。当時、入学してきたばかりの1年生が小学校の先生と取り組んだ語り合いの部落問題学習を誇りにしていました。その子どもたちが初めて実施した全体学習に、小学校6年の担任の先生方に参観してもらいました。その全体学習では、子どもたち20人、30人の手が挙がって、一人一人が自分のことを語っていきました。参観している6年の元担任への尊敬と感謝を語る生徒もいました。

それ以後、その学年は、毎回全体学習が公開し、常に県内外からの参観者を迎えて、語り合いの部落問題学習を積み上げていきます。多い時には、5台から6台のビデオカメラが回っている状態で授業を公開し、思いを語っていくという場がありました。部落問題をなくしていくために、様々な人権問題を解決していくために、その授業を公開するという誇り、よろこびをつかんでいった3年間でした。

その当時、一緒に実践した先生もこの会場においでいただいています。この全体学習の中で、中学1年から3年まで、素直にひたむきに語り続けてきたDさんが今回パネリストです。今は、広島の方で臨床心理士をされています。今回、臨床心理士という仕事と全体学習とのつながり、中学時代に自分自身を綴っていた生活ノートについての原稿を事前に送ってもらったりしたんですけど、中学時代、「ひとごと」から「わがこと」として取り組んだ全体学習が、今どういうふうに彼女の中に残っているか、当時のことを振り返って話してもらいます。それでは、Dさんお願いします。皆さん、拍手をしてください。(拍手)

《パネリスト D》

Dと言います。広島県で臨床心理士をされていて、今、一連の流れを聞いていて、ちょっと思ったことがありますので話をさせていただきます。私は広島県で暮らして10年以上になるんですが、その間、部落問題学習を考える機会というのはなかなかなかったんです。

その中で今日、こういう機会をいただいて、考えるにあたって、いろんな皆さんの意見を聞いて、読んで、テーマでもある「ひとごと」から「わがこと」へということなんですが、「ひとごと」になっていたなというのを、今、すごく感じています。

部落問題に出会うことも本当になくて、「ひとごと」になっていたなと感じていて、先ほどのCさんの報告原稿を聞かせていただいて思い出したんですけど、大学とかの20代くらいの時に、その年代の女の子だったら、好きな人がいたり、恋人がいたりして、結婚したいとか、憧れみたいなものもあると思うんですが、その当時私の友だちは、憧れの人がいて、自分が部落出身だということがわかったらどうしようと言って泣いていた。

その時のことを思い出して、その子に何もできなかったんですけど、友だちはその当時の彼と今結婚しています。私は「ああよかった」って単純に思っていて、今話を聞く中で、問題を見失っていたんじゃないかなと、今考えています。

(上を見つめながら考えるように)普段の生活で、部落問題学習自体は、時が経っているので、なかなか…。私が中学校の時にやってきた部落問題学習も、全体学習の日だけやってきたと感じて、毎日の中ではあまりやってなかったなと思います。

人権学習について、生活ノートといって、日記みたいなものなんですけど、自分の思いを書くと、先生がそれについて書いて返すということをやっていたんですけど、そういう書いていたことなどを今振り返って、どうなんだろうなと思うと、あの頃から基本的なところは変わっていません。

今日のチラシのメッセージにも書いたんですけど、生活している中で一番気がつくというか、よく出会うのは、ジェンダーなどの差別的な問題であったりするんですが、生活の中で出会った時に、「あれっ、おかしくない？」というようなことが、「これって差別なのかな？」とか「これってどうなの？」と考える。そ

ういう考えることって、何かに引っかかって、そのことについてなぜ引っかかるんだろうと考える過程は、全体学習や、板野中学校でやってきたことと一緒に思います。

A先生の先ほど言っていたと思うんですけど、「無知ほど怖いものはない」という言葉がすごく自分と重なって、やっぱり、気になると、「どうなんだろう」「どうなんだろう」と考えます。やっぱり、知らないと怖いと思うんです。

なぜ、そう思ったかという、その人を知れば知るほど差別ってできなくて、「この人何だろう」と思ったとしても、その人を知れば知るほど、いろんな側面が見えてくるし、その人の正しいことがわかってくると、これは、自分の中の勝手な判断だったり、差別だったり、不安だったりというのがそうさせていたんだなと思って、何か、そういう基本的なところというのは、全体学習とか生活ノートの営みと似ているかなと思います。あの時やってきたことが、部落問題をしていても、それ以外の問題にも通じているんだなと思います。

自分が混乱していて、いろんなことを感じているんですが、久々にこういう場に来たので、自分の中に刺激がたくさん入っているんですが、なかなか整理がつかないところがあって、皆さんに、どういうふうにお伝えをしたらいいんだろうかとわからなくなってしまったんですけど、こうして振り返って思ったんですが、でも、やっぱりこういうところに来ると、それを見て見ぬふりをしていたのかなとか、やっぱり気づきがあるし、そういう意味でも、自分がこういうところに来ることがすごく大事なことかなと思います。

あの頃は、部落問題学習をすることが日常的なことだったんですけど、それは、先生方が考えてくださっているから日常的なことであって、自分が離れてしまうと、日常の中でそれを自分自身で見つけていくとか、つくっていくとか、自分からアクションを起こさないと、どんどん「ひとごと」になっていくのかなという気がしました。

あの場所が、自分をさらけ出せて、いろんな人の意見を聞いて、その意見をもらった後で自分はどうなんだろうと考える。そして、その自分の考えを言う。そしてまたいろんな意見がもらえたりする。その繰り返しだったなと思うんですが、そういう機会とか場があるから考えていけていたのかなと、今、実感として思っています。

私が今やっていることって、日常の生活の中で引っかかった時に…、そのひっかかり自体が引っかかるかということもあるんですが、今、知らない間にジェンダーの問題が自分の生活の中に入り込んでいて、知らない間に片棒を担いでいたり…。そういう時に、自分一人だとそういうことも伝えられなくて、…そういうことを考えると、あの全体学習の場というのはすごく大事だなと思います。あの場では仲間だった。いろんな立場、いろんな考えがあっても仲間。私も自分がさらけ出せるけど、向こうもさらけ出せる。そういう中で引っかかることができたのかなと思います。そういう場があったことがありがたかったなと思います。(コーディネーターを見ながら)これくらいなんですけど。

《コーディネーター A》

はい、ありがとうございます。ご苦労様でした。拍手をお願いします。(会場より拍手)全体学習という場面で、マイクを握って自分のことを語るといのは、多分、やった者にしかわからないと思うんです。

私が松茂中学校に赴任した4年前、中学3年の生徒を担当したんですが、部落問題には全く関心がない。「ひとごと」です。それで、私自身のこと、私自身が部落出身であると話した時に、「ええっ?!先生がそうなんですか?そういう人が本当にいたんですか?」そういう反応でした。それは本当に「ひとごと」だし、自分には関係ないことなんです。でも、出会うことによって変わっていくんです。

今日、前でカメラが回っていますが、その1年間で7つの授業を映像に残し、記録にしました。その子どもたちが語った言葉が、その記録や映像の中にあるわけです。それが子どもたちにとって誇りになっていくし、「わがこと」になっていきます。語るということ。今まで、こんなことは誰にも言わないと思っていた

たことが語れるということ。そのことが生徒一人一人の自尊感情をグッと上げていくんです。

5つのワードが子どもたちの中に広がっていきます。「共感」と「連帯」です。「信頼」と「尊敬」です。そして、最後は「感謝」なんです。その関係というのは、本当に神々しい、まぶしい姿を放っていきます。

今、3年生の子どもたちを受け持っているんですが、チーム担任制で、道徳や人権学習が、4クラス同時進行で展開できます。学級開きについて語る。私は社会科の教師ですから、中学3年の歴史学習で、第一次世界大戦、第二次世界大戦と戦争の歴史を教えます。そして、その歴史から学んだことを語ってもらいます。これは、2学期になりますけど、私の道徳読み物資料「峠」について、結婚差別について語ります。その語りを受けて、子どもたちの「わがこと」を語ってもらう人権学習を実施します。

そんな人権学習や道徳学習において、生徒一人一人がマイクを握って語った場面が映像に残っていくんです。そういう時代です。それをパワーポイントにして、5月の語り、6月の語り、7月の語り。9月の語り。7つ、8つの授業での語りの場を経験する。そのことで言葉の力が見事についていくんです。

最初の語りと2回目、3回目の語りは全く違います。それはまさに全体学習で私が学んだことです。子どもが子どもを変えていく。その語りの中で変わっていく。そのベースは何かというのは、今回、B先生が中心になって立ち上げてくれた「T-over人権教育研究所」これは「峠を越えて」という板野中学校での実践記録の「T-over」なんですね。この「T-over人権教育研究所」の文章をB先生が作ってくれました。資料にも入っていますが、この文章の朗読(音声)を今から聞いてもらいます。

【音声】

T-over人権教育研究所

「ひとごと」から「わがこと」へをテーマに、1990年度板野中学校において、学年全体で語り合う人権・部落問題学習(全体学習)に取り組み始めました。

語り合いの人権学習で中学生に常に問うてきたことは、「本音で語り合う」ことでした。言い換えれば、自分の中にある本当の思いを素直に伝えること、表現することです。

これは、そうなることを願いながらも、なかなか実現できるものではありませんでした。では、どうすれば可能となってきたのか。

答えはシンプルでした。「教師が本音を語る」です。「こんなことは絶対人に言うことはない」と思ってきたことをまず教師から語っていったのです。それは、「教師が解放されずに、子どもたちが解放されることはない」との考えからでした。

「プライベートな問題だから」と言って、ありのままの自分を殻に閉じ込める風潮があります。でも、そうすることで、人はどんどん孤立していきます。

その殻を敢えて突き破ることによって、自己を解放していく姿を、子どもたちに伝えていきました。

その教師の姿を通して、子どもたちもありのままの自分を語っていきました。本音を語りはじめました。自分の中にある本当の思いを素直に伝えること、表現することの大切さに気づいていったのです。すると変化が起きました。

自分の未来を、仲間の未来を、共に描いていこうとする力強さに満ちていったのです。生き方が変わっていったのです。それは子どもたちの未来が変わることでもありました。

私たちの周りには、まだまだ解放されない現実で溢れています。そんな現実を変えるためにも、本気の人権教育が必要と考えます。

そんな「わがこと」を語り合う人権学習が広がっていくことを願い、その必要性や有効性を伝えるため、T-over人権教育研究所を設立し取り組んでいくことにしました。

《コーディネーター A》

この文章は、T-over人権教育研究所・人権こども塾を立ち上げたB先生の文章です。彼とは、板野中学校

の全体学習の取り組みをずっと積み上げてきました。

このフォーラムもまさに全体学習になってきたんです。今回は、新型コロナウイルス感染症の関係で県外からの参加は、来ていただいている方もありますが、ほとんどおいでいただけていません。この15年間、毎年この場においていただき、毎回マイクを握って思いを語っていただいている鳥取の佐伯さんという方がおられます。(分厚いファイルを手を持ち、会場にかざしながら)その方が、この鳴門市人権地域フォーラムの16年間の記録(2004年度～2019年度)を一冊のファイルにまとめられたものを、鳴門市の教育委員会に送られています。

このファイルの中に、16年間のすべての記録が入っています。では、どうして記録を残したかという、それは、本当の話をしているからです。そして、佐伯さん自身も職場で揺れている。本当に切ない人間関係で苦しむ。その時に語ったこと。それに徳島の中学生や高校生が思いを返してくれた。その子どもたちの言葉が佐伯さんの背中をぐっと押してくれた。ここで語った後に、出会った徳島の中学生との温かい交流が生まれていったんです。そういう出会いとつながりがこの場にあって、毎年この会に来るのを楽しみにされています。

今回は、彼女は看護師という立場もあるし、県外への移動はできないということで、早い時期から、「先生、今年は難しいと思います」ということで、「そこには行けないけれど、心は近くあり続けたいということもあり、こういうフォーラムをずっと続けていただいている鳴門市への感謝も込めて、記録の冊子を鳴門市の教育委員会に送りました。」という連絡をいただきました。

本当に、毎年多くの県外の方がここでマイクを握る。それは自分自身をさらけ出していくという場になっている。それは、やっぱり自分が解放されていくということです。子どもたちもそうです。自分を語った瞬間、価値観が変わる。誇りが生まれていく。マイナスであったことが見事にプラスに変わっていく。そういう世界が広がっていった。それをやっぱり私たちが学んできたんだと思います。人権学習の可能性や力というものを実感するようになりました。そんな思いをこれからB先生に語ってもらいます。それでは拍手をお願いします。(拍手)

《パネリスト B》

Bです。何から話をしようかと思っているんですが、子どもたちは基本的に、自分を表現したいと思っている子が多いと思います。中には自分を表現することが苦手な子もいて、人前で話すのは苦手だという子はいるんですけれども、基本的に欲求として自分を表現したいと思っている子がほとんどのような気がします。

先ほどDさんが、「知れば知るほど人を好きになる」というようなことを言ってくださったんですが、まったく同じ感覚の子どもたちが多いです。人権学習というか、僕たちは全体学習という言い方をしていたので、全体学習と言いますが、全体学習をして同じような感覚になったんですが、僕は教員をし始めて4年目くらいに一番最初に全体学習を見た時に、「これはあり得ない。中学生がこんなにもものを言うはずがない。」と思ったんです。

道徳の時間に人権学習をすることが多かったんですけど、人権学習をしても子どもたちはものを言わないと思ったんです。目の前の子どもたちは言わなかったですから、言うはずがないと思ってた。

ところが、僕が板野中学校に変わってきて、全体学習を見た時に、本当に林のように手が挙がっていくんです。僕は、数学の教員ですけど、たまに数学の授業で多くの手が挙がることはあるんです。人権学習の時間にそんなの林立するように手が挙がることはなかったんですけど、目の前にそういう光景が現れた時、これは何かからくりがあるに違いないと思ったんです。なんと汚い人間でしょう。そんなふうに思うのは、この私のことなんですけど、なんと心の醜い人間だろうと思ったんです。それほど、ありえないことでした。

なぜこうなっているんだろうと考えていった時に、出てきたのは、先ほどA先生が言ってくださったんですけど、まず教師が本音で語る。教師が自分の中にある思いをまずしゃべる。教師が自分のことは棚に上げ

ておいて子どもたちにしゃべれと言っても、それは、表面的なことはしゃべるかもしれないけれど、心の奥底のことまでは、中にはしゃべれることもあるかもしれないけれども、基本的にはしゃべれないのではないかなと思います。

わがこととしてしゃべる。私が自分のクラスでしゃべった場面というのは、今でもありありと覚えています。私が一人暮らしをしていた時、教師でありバイト仲間である友人が私を訪ねてくるわけです。お酒を飲みましょうということで、飲みながら話をしていくんですが、その頃、私の中では、部落問題学習をし始めていた時期でしたから、まだ、ピンと来ていないこともたくさんあったんです。

だけど、私のクラスの子どもたちは、特に学習会に行っていた子どもたちは、「差別はおかしい」ということを一生懸命しゃべるわけです。語るわけです。「どうしたらなくせるのか」ということを一生懸命しゃべるわけです。

そんな時に、友人がお酒をもって私のところにやってきた。そして、話をしていく中で、なぜだったかわかりませんが、部落問題、同和問題の話になりました。すると、その友人は私の後輩になるわけですが、私の目の前で部落差別発言をし始めるわけです。私が何をしているのかは知りません。教員としてどんなことを取り組んでいるのかを知らないので、そういうことが言えたのかもしれない、いろんな差別的な言葉を言っていくんですね。

聞いているうちに気分が悪くなるんです。教室でしゃべっていたあの子の顔、あの子の顔、あの子の顔といっぱい浮かんでくるわけです。その子らに嘘はつけませんし、やっぱり、「ここで踏ん張りたい」と思うんですね。

その友人に、「そこは違う。そうじゃないんじゃないか」と言うんですが、友人は、それに反発してまた返してくるんですね。返してくれたことにまた返すんですね。夜中の11時12時に飲んでいて、朝方4時からいまでずっとその話ばかりなんです。こちらも納得いきませんからしゃべっていく中で、友人も「もう眠たいから帰りますわ」と言って帰って行ったんですが、残された私は、カッカカッカしている。何ともやもやしたものが残ったままだったんです。

あくる日、と言ってもその日ですね。朝、学校に行き、車では行けないのでJRで行ったんです。1時間目の授業が始まるのが8時45分なんですが、列車が駅に着いたのが8時45分です。「遅れます」と電話をして、遅れて走って行ったんですが、昔の話ですからもう時効だと思うんですが、お酒臭いのが自分でわかるんですね。

お酒臭いのが自分でもわかりながら自分のクラスの授業に行くんですが、気持ちはまだカッカカッカしているんで、クラスの子どもたちに、「実はな…」という話をし始めるんです。昨日友だちが来ていてこんなことがあって、こんな会話があって、こんなやり取りがあってと、朝方の別れるまでのことを話して、それでこんなことになってしまったんだという話をするんです。

その時に、ずっと自分の中に秘めていた思いを、初めて子どもたちの前でしゃべったんです。その時に、言おうと思っても言えない感覚というのを分かっていただけですか？気持ちは言おうと思うんですが、喉につかえて言えない。言葉が出るより前に涙がこぼれる。口から出た言葉は、こんな状況で話していますから、きちんと伝わったかどうかはわかりません。でも、自分の中に秘めていたものをさらけ出した。けど、しゃべったのは良いんですが、しゃべった後ですよ。子どもらがどう受け止めてくれたかはわからない。ちゃんと受け止めてくれたのか、どう受け止めてくれたのか、すごく不安だったんです。すごく不安で、子どもらに嫌われてしまうんじゃないかとも思ったんです。

その日一日が終わって、子どもらは日記(生活ノート)を書いてくるわけですが、その日記に、子どもらは思いっきり書いてきてくれました。それを読みながら、「よかったなあ」と言っているのかわからないんですが、ちゃんと伝わっていたんだなあと思いました。

言ったことは無駄ではなかったと思うんです。それまで、子どもらが自分のことをしゃべる、自分も胸の

底にあることをしゃべるといことはどういうことなのか、その、苦しさとかしんどさが一体どんなものなのかということ、わからずに教員をやってきましたけれども、「ああ、こういうことだったのかもしれない」とわかったのは、その時くらいからです。

私の中でスッキリする部分もありました。「ああ、やっと言えた。よかった」と思える部分もありました。当時そんな先生がいっぱいいました。みんながそれぞれ自分のことをしゃべっていく。しゃべれる。そんな雰囲気のある学校になっていった気がします。

子どもらも、それによって変わっていったような感じがするんです。子どもら一人一人に聞いていませんからわかりません。だけど、Dさんは、先ほど、見て見ぬ振りもしてきたのかもしれないというようなことを言ったけど、例えば今回、パネリストをと連絡した時に、すぐに反応をしてくれた。

ということは、見て見ぬふりをしてきたと彼女は言うけれど、自分の中でずっと、どこか自分の中で残ってきたものがあつたから、今回連絡をしようと思ったし、連絡した時にすぐに反応を返してくれたんじゃないかなという気がするんです。

その根底にあるのが、中学生の時に話をして、子どもら同士でずっと話し合いをしてきて、結論とかは出ないです。差別はいけないということはわかっていますから。多分みんな分かっているんです。でも、どうしたらいいかということ、結局ぼんやりしていたと思うんです。でも、徹底的に語り合いをしていくことで、何かしら、子どもたちにもそれを乗り越えていく力になったなと思います。

私は今、徳島市内にある八万中学校というところに勤めています。4年目になるんですが、この間、人権作文意見発表会をしました。どこの学校でもやられているのではないかなと思うんですが、ただ、この新型コロナウイルス感染対策下で、作文は書けるんですが、発表会がなかなかしにくい状況だと思うんです。

でも、何とか3密を避けるという形で、体育館で1年生200人が集まって、発表会もして、意見交換もして、感想を言い合つてということをしてきたんですけど、これがすごく発言するんです。

不安を持っていた先生もおられたんです。手を挙げるだろうかとか、発言するだろうかと思われていた先生もおられたんですけど、「いけますよ。大丈夫、大丈夫。絶対手を挙げますから、話しますよ。」と言っていたのが、案の定その通り。

今回、3か月の臨時休校の間に、子どもたちどんなことを考えたのかなと思うんです。大人が思う以上に人権作文の中身がすごく濃かった気がします。もちろん新型コロナウイルス感染についての差別のこと、アメリカであった黒人の方に対する人種差別のこと、現在を取り巻くジェンダーのこと、いじめ問題のこと、不登校のこと、いろんなことを子どもたちは言っていたんです。人の発言によく反応する子どもたちがいて、やっぱり子どもたちはおもしろいなあ、すごいなということをおぼせられました。

新型コロナウイルス感染対策禍で、夏休み登校学習ということもあって、今年は8月6日が登校日でした。8月6日は、私は毎年広島に行っているんです。原爆投下の日の記念式典に参加するために。自分の中で忘れてはいけない大切なこととして参加するんです。でも、今年に行けなかったんですね。すると、若い先生が言ったんです。8月6日の朝、生徒に見せましょうと。それもそうだな、それもいいよと言って、8月5日に平和学習をしておいて、6日に教室のテレビで記念式典を見せたんです。

子どもたちは面白いですね。テレビで、「参会者の皆さんはご起立ください。」その呼びかけに、テレビを見ている子どもたちがバラバラと立ち始めるんです。教師から何も言っていないんですけど、テレビから「黙祷」という声が流れると、一緒に黙祷をするんです。子どもらは面白いなと思うんですけど、登校の日に、僕は広島には行けなかったけど、逆手にとってそういうことができ、それも良かったなと思ったんです。

ちょうどいい機会だったので、生徒に、お家の人に対して戦争についての聞き取りをしてもらったんです。8月14日の徳島新聞に、「戦争について」という、戦争当時の生活について書かれたものの特集号のようなものがあつたんですが、それに、家の人に聞き取りをしてもらったことを投稿して新聞に載ったんです。

その子は、ひいおじいちゃんの生活をおじいちゃんから聞き取りをされていて、満州の話でした。その、新

聞に載った子のおじいちゃんが話をしてくれました。おじいちゃんはその新聞を見て、その子を前にして涙を流してよろこんでいたと言うんです。

おじいちゃんが、「自分のお父さんの戦争体験の、自分が話をしたことを孫が書いてくれた。書いてくれたことが新聞に載った。」と言ってくれたことに感動したその子が、またそのことを書いてくるんです。それを見て私たちも感動するんですが。

自由に表現できる機会をどう確保するか。「T-over」というのは、そういう部分をなんとか広げていきたい。そういうことが大切であるということ、多くの先生方に多くの学校で取り組んで行ってもらいたいという目標に向かって作ったということです。まだ伝えたいこともたくさんあるんですが、とりあえず以上です。

《コーディネーター A》

ありがとうございました。拍手をお願いします。(会場から拍手)この会場にも、もう登校日が始まって、学校の先生方の中でも来たかった先生方もたくさんおられて、でも、今、いろいろな取り組みがあって、会場自体がこういう椅子の間をあけた、参加制限をした状態ですから、たくさんの人に声をかけるということができませんでした。板野中学校で起こったこと、それはやっぱり、すべての学校で実現していく取り組みであるということを実感します。

それは学校教育だけではなくて、社会教育の中でもそうだと思うんです。本当のことが言える。ずっと抱え込んできた、こんなことは絶対人に言うことはないと思ったことが言える。生まれは変えられないけれど生き方は変えることができる。本当に人間というのは、こんなに変わるんだというくらい変わっていくんだということを実感します。

私は、教師になって39年目で、61歳です。61歳の学級担任というのは、チーム担任制という制度があって、非常にありがたい、私にとって本当によろこびの制度なんです。若い先生に支えられながら、学級担任として、今日も午前中子どもたちは実力テストでした。授業に対する自分の思いを語れるわけですね。頑張ろうということを語れるわけです。それが誇りであるし、よろこびになってきます。

藍住中学校の「水平社宣言」について語り合った部落問題学習が私のスタートでした。私は20代、1986年11月13日に開催された文部省指定の同和問題研究発表会の公開授業です。その授業の映像が、今も残っています。それを時々見ますし、当時の教え子たちも40代後半になっていますが、その人たちにも見てもらうということがあります。20年、30年、40年という歳月が過ぎていっても、ずっと生きる証として残っていくのが、この教育のすごさだと思うんです。

北島中学校に赴任した2006年に、私はあるクラスで、自分の思いのたけを語った時、1人の男の子が自分のお母さんのことを語りました。お母さんが突然記憶喪失になって、その生徒のことがわからなくなったという場面を語りました。

その時、横にいた女の子が、何でそんなことが言えるのかと言って声を上げて泣きました。泣きながら自分の受けてきた母親の非常に切ない対応、虐待の事実を赤裸々に語ってきました。その生徒は、その語りで人生が変わっていきます。そこから自分をむごいに合わせた母親に、自分は今、こんなに幸せであるという手紙を書き続けます。

(思いを込めて力強く)決して返事は来ません。でも、手紙を書き続けます。何回も書きます。来ない返事が来るんですね。その封筒の中に、自分が遠足で行ったUSJのお土産。母親に送ったはずのそのお土産が送り返されてきた。「もう迷惑だから手紙を書かないで欲しい」という手紙が入っていました。彼女にとって、この事実は衝撃です。

彼女はその事実を生活ノートに書いてきました。私は、その文章を担当に見せられた時に思いました。彼女のお母さんは、どういう気持ちでその手紙を書いてきたか、キーホルダーを送り返してきたか、そのこと

はわからないけど、この生徒は、大きく成長したと思ったんです。

私は、その生徒にこう言いました。「あなたは変わった」と。

「お母さんはどういう気持ちでそれを送り返してきたか。あなたはあなたの人生を頑張れということかもわからない。お母さんは苗字も変わってということもあるから、もう関わらないでほしいということもあるかもわからない。でも、あなたは変わった。」という話をしました。

本当に人間というのは変わるんです。大人も子どもも一緒だと思うんです。自分で自分を変えていく、そんな学びだと思うんです。そのきっかけをつくった生徒が、学年全体の語り合いの学習の中で、お母さんのことを再び語るんです。その語り合いが、彼をまた変えていきます。

彼らが中学3年になった時、2007年11月1日に板野郡人権教育研究大会の公開授業を学年全体で、北島町の創世ホールで公開授業をしたんです。その時に、その生徒は壇上に上がって、壇上から思いを語るようになります。板野郡の先生方だけではなくて、県外からの先生方もたくさん来られていました。早い時間に男の先生が来られていました。顔を見たことのない先生だったので、「どちらからですか？」と声をかけたら、「保護者です」と言われました。

それは、母親のことを語る生徒の父親でした。息子に「今日の舞台を用意してくれた先生方に対するご恩を忘れるな」と父親が話してくれたことを、その生徒はその日の生活ノートに綴っていました。その時の言葉がずっと残ります。

そして、彼は、大学1年になった時、北島中学校1年生に、中学時代の「語り合いの人権学習」のこと、そして今、教師を目指して頑張っているということを語ってもらおうという場をつくりました。その言葉もやっぱり子どもたちの中に残っていくし、子どもたちの生きる力になりました。

今日、登校日で授業があったと思うんですが、今日、この会場に彼が来て来ています。教師になった彼に語ってもらおうという約束をしています。それでは、E君いきましょうか。ここでマイクを用意していますのでどうぞ。(男性がマイクの位置に着くのを待って)北島小学校(教諭)のE君(E先生)です。拍手をお願いします。(拍手)

《フロア E》

今、すごくハードルが上がった形での紹介だったので、心苦しいところもあるんですが、Eと言います。今、板野郡の北島小学校というところで教員をさせてもらっています。

この人権フォーラムも3回目の参加になります。1回目は、今から15年ほど前、自分が中学3年生の時に、A先生から声をかけていただいて参加させてもらいました。今日は、新型コロナウイルス感染症がこのような状況の中、中学生の参加がないというのが、非常に残念なんですが、自分のことについて少しお話をさせてもらったらと思います。

私自身の人生が大きく変わったのは、中学2年の時なんです。この中学2年の時に何があったかというのと、A先生が北島中学校に転勤してこられて、それが出会いなんです。その出会いと同時にやってきたのが人権学習、語り合いの学習だったんです。

その中学1年の時に人権学習をした記憶はほとんどないんです。そんなことを言ってしまうと、中学1年までの、その時の先生もこの会場におられるので、申し訳ないと思うんですけど、心の中で、「中学の時に、私もちゃんと人権学習をやっていたわ」と突っ込まれていると思うのですが、私の記憶には全然ないんです。その理由としては、それまでの語る学習のことを、「ひとごと」として自分自身の中で考えていたので、自分の頭の中に残っていないんだなと思うんです。今、振り返ってみて、そう思っています。

この語り合いの学習を僕自身が中学2年で経験させてもらって、最初の頃は、この学習もきれいごとと並べて終わる学習なんだろうなと、私自身も思っていましたし、友だちもそのように思っていました。

でも、その語り合いの学習をA先生が軸をなっていて途中で、どんどん、一人、また一人と友だちが

変わっていきました。自分から話すようになるんです。自分の心の中の気持ちを言うようになるんです。それはなぜかなと考えるんですが、それはやっぱり、A先生自身が自分のことを本音で、私たち子どもたちに向かって本気で語り続けてくれるので、みんな一人一人がしっかり変わっていったんだなと思っています。

忘れもしない中学2年の冬、私自身も、語り合いの学習に自分から進んで参加したいと思うようになって、先程の先生の話にもあったんですが、私の母のあることについて人権学習の時にみんなの前で話をしました。

そのことは、別に話さなくてもいいことだし、話さなくても生きていけるなと思うんです。でも、自分の気持ちも語ることによってスッキリしますし、A先生自身が、語り合いの学習でみんなが「わがこと」として話を聞いてくれる雰囲気づくりをしてくれるので、私自身も、話をしていて、話してよかったなと思うようになったんです。

中学3年生になってから、私の人生を大きく変えてくれたA先生のように、私自身も、人の人生をちょっとでもいい方向に変えていける教員になりたいと思うようになりました。今、私の話を聞いてもらってわかると思うんですけど、一気にになれるような人間ではないので、必死に努力を積み重ねて、子どもたちとやってきている今の自分があります。

自分も小学校の先生となり、5年生の担任なんですけど、5年生の子どもたちと人権学習をします。でもなかなかうまく行かないのが現実なんです。なかなか、自分の本音を子どもたちに届けていくというのは、難しいことだなと思うんですが、やっぱり、教師自身が本音で語っていく。そして聞く。子どもたちを、「わがこと」として考えられる、考えたことを表現できる子どもたちに育てていくことが、今の時代すごく大事なことだなと考えております。私自身もまだまだ未熟で、できていない状況が続いています。

でも、この人権フォーラムに参加させてもらって、パネリストの方々の話を聞かせてもらって、自分の中で、本音で語れるヒントというものを、今日たくさんいただいて、この後もたくさんヒントをいただきたいと思っています。帰ってから、このいただいたヒントを子どもたちに返せるように、私自身頑張っていきたいなと思っています。私は、A先生のような、人を変えられる教員を目指して、これからも頑張っていこうと思います。すごく壮大な夢ですけど、今日はありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

ありがとうございました。語り合いの人権学習のよろこび、それは出会いとつながりです。語り合うという出会いの中で私たちの価値観が変わっていくし、語り合いの中で、本当に出会えたことがよろこびになっていきます。そういう語り合いの場に身を置く。そして、自分を伝えていく。この場もそうだと思うんです。こんなことを絶対言うことはない。言わなくてもいいんですよ。でも、一歩踏み出すことで、変わるんです。

教師になった当時、自分が生徒に部落出身だということを語るというのは、夢にも思っていませんでした。でも、板野中学校に赴任した時に、揺れる子どもたち、部落の子どもたちに対して、差別的なことをサラッとと言われる親御さんと出会った時に、これを聞き流したら、これをこのままにしていたら、俺は教師でなくなると思う瞬間があるんですね。伝わるかどうかはかわからないけど、自分の精一杯を伝えていくしかないと思う瞬間があるんです。

そして、「実は、私は…」と自分自身のことを伝えた瞬間に、私自身が変わるんです。生徒のためではなくて、私自身が変わるんです。これがやっぱり人権学習のよろこびだし、その中で出会っていける。つながっていける生徒たちや仲間の先生方とのつながりが生きる糧となっています。

このフォーラムには、毎年県外からたくさんの方が参加していただいています。そして、マイクを握って、ご自身の思いを語っていただいています。それは、県外だから言えるというところもあるけど、自分自身のことを語るにより、生きる力が湧いていく。そんな学びになっていくんです。

今回、新型コロナウイルス感染症の流行という大変な中で、たくさんの方がここに集まっていただきました。本当に限られた時間ですけど、ここに集まった思いを語っていただけたらうれしいなと思います。後、

数名の方になるかどうかと思うんですけど、いかがでしょうか。(パネリストのDさんから語りたいとの意思表示がある)はい、どうぞ。

《パネリスト D》

今、お話を聞いていて、確かに、言わなくてもいいことを言うことによってつながっていけるということを考えてみると、言わなくてもいいこと、言いたくないことを全部ひっくるめて自分自身であって、それを言った時に、全部ひっくるめて自分自身だと受け止めてもらえて、認めてもらえるというのは、それって素敵な話だなと思っています。

私は今、臨床心理士をしています。私のところに来る患者さんは、やっぱり、なかなか自分を認められない。周囲からも認められないし、そういう自分が嫌だということに

立っているような患者さんもたくさんいらっしゃるんです。そのことと重ねて思う時、患者さん自身が嫌だなと思っている所も含めて、その人であって、その人自身がすごく素敵だなと思うところもあって、こういう全体学習とか人権学習とかで、何もかもまるごと自分を認めてくれるって、それ自体が、自分も自分を認められるようになり、周りからも認められて、だからこそ変われるのかなと思ったので、ちょっと試してみたいなと思いました。

《コーディネーター A》

本当に伝えるということで変わっていきそうですね。

「T-over」《T：たがいにover：越える・T：ともにover：越える・Talk over：じっくり話し合う》

という人権教育の取り組みに賛同した仲間が中心となって「人権を語り合う中学生交流集会」が今年27回目になります。

この集会は、板野中学校の部落の子どもたちが、部落問題を学び合う場ということで立ち上げたんですけど、同和問題に関わる特別対策が終了した2002年以降、地区の子どもたちの社会的立場の自覚がなかなかされなくなり、徳島県内からの参加は、地区外の子どもたちが大半を占めるようになります。

当然、私が勤務する松茂中学校の生徒も参加しています。昨年度、脊柱側弯症という病気でコルセットを巻いて生活している女子生徒が、体育館での集会の時、体育座りができないんですね。藍住中学校などは、合同教室があって、パイプ椅子の合同教室があるんです。松茂中学校は体育館しかないんです。体育館に椅子を並べるといのは大変な作業で、いつも子どもたちは体育座りで、1時間2時間の話を聞くわけです。長い映画を体育館で観るわけです。その中で一人パイプ椅子に座り続けていくというのは、どんなにむごいことか。どんなに辛いことか。

他の生徒たちは、彼女のことを理解していますよ。でも、子どもですから、お尻が痛いんですよ。腰が痛いんですよ。私も本当に痛いんですよ。でも、必死に一緒に2時間座りますよ。子どもたちが、ちらっとそのパイプ椅子に座っているその子を見るわけですよ。そのまなざしが苦しいんですよ。いつも、何とかならないのかと思います。

藍住中学校の合同教室のような学校の設備って、やっぱり大事だなと思いますよ。でも、そんな中でも彼女はぐっと我慢するわけです。そのことを昨年の中学生集会で、人権作文に書いたんです。発表したんです。なかなかそれは自分の中学校では発表しにくい内容です。

でも、中学生集會には、人権学習に思いを持っている仲間たちが、徳島県下だけでなく県外からも参加するんですね。福井県からも参加する。鳥取県からも参加する。香川県からもたくさん参加するんですね。その生徒たちの語りやまなざしから、本当に力をもらうんですね。そんなつながりができた生徒にとって、中学3年になった今年度の中学生集會が楽しみで仕方ないんです。

でも、今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響でどうなるかわからない。本来ならば7月の後半に大

会があるんですけど、延期になりました。10月に第2波、第3波がなかったらできるんですが、8月1日に第1回の実行委員会を実施したんです。

その時に、その生徒は、今年も人権作文の発表してくれるようになりました。それは、本日の要項に挟んでいる「新型コロナウイルス感染症による差別」という人権作文です。

今年度は、1年生、2年生も参加してくれるようになりましたので、この中学生集会の事前学習として、この中学生集会は、部落問題を「わがこと」として、イキイキと語り合った板野中学校の部落問題学習がベースにあることを語っていきました。その語りに寄せて、コロナ差別に対する作文を書いた生徒は、次のような感想を綴ってくれました。その感想を彼女に朗読してもらった音声です。

【音声】

人権を語り合う中学生交流集会の原点 ～「板野中学校の部落問題学習」に学ぶ人権学習～

松茂中学校 3年

未だに部落差別がなくならないことは本当に悲しいことです。私は差別は「自分には関係ない」「昔からあるから仕方ない」と思っている人の心を「差別をなくしたい」と思ってもらえるように変えていきたいなと思っています。だから、自分が差別のことをよく知り、人の心の傷みのわかる人間にならないといけなと思います。

A先生が「差別・被差別を超える人権教育」という本を貸してくれました。人権教育に関する大学の先生が書いた難しい本でした。家に帰ってパッとページをめくっていくと、普段から慣れ親しんでいる詩「峠」のこと、M先生の授業のことなどが書かれていました。

この本の題名の「差別・被差別を超える…」というのは差別をする人、される人が本気で語り合う(対話・応答)ことによって人間同士のつながりや絆などを深めることによって、みんなの心の中で人を大切にしたいという気持ちが差別する心を超えていくことになるのだと思いました。

中学生人権交流集会では、差別や人権について積極的に意見が交わされます。去年は、みんなの前で発表をし、とても緊張しましたが、みんなからたくさんの意見を聴くことができ、とても価値のある集会になったと思います。今年も発表することができるので楽しみです。今年は新型コロナウイルス感染症のため、県外の中学生と人権について語り合うことができず、集会の回数もとても少なくなり、残念ですが、松中からは中3だけでなく、後輩も参加することになりました。人権学習を通して成長し、人間として大きくなれば良いなと思いました。

《コーディネーター A》

皆さん、この「差別・被差別を超える人権教育」というのは、広島大学名誉教授である原田 彰先生が書かれた板野中学校の1990年度と1991年度の部落問題学習の記録を分析された論文です。本当に難しい論文です。

でも、その生徒に「読んでみる？」と言ったら、ニコニコして受け取って持って帰り、3日4日で読み終え、生活ノートに感想を書いている。そして、このレポートにも、原田先生の論文から学んだことを綴っているんです。皆さん、どこの中学校や高校にも、本当にすごい生徒がいるし、人権学習への深い学びを求めている生徒がいるし、人権に寄せる思いを語りたい生徒がいるんです。

そのために、私たちは、安心して自分のことが言える学びの場をつくり続けなければならないと思うんです。本当の自分が安心して表現できる。そういう人間的な関係の中で、私たちは解放されていくし、この学びが、この取り組みがよろこびになっていくんだと思うんです。

コロナ差別について書いてきた人権作文も、本当に彼女自身の思いがあふれています。これは私たちの心に迫っていく内容です。紹介します。これは、8月1日に開催した人権を語り合う中学生交流集会、第1回実行委員会の時に発表してもらった時の彼女自身の音声です。この作文は、10月18日(日)の本大会で発表して、多くの仲間と、この作文に寄せる思いを語り合いながら、人権問題に寄せる思いを出し合い、交流する

ことになっています。それでは、人権作文「新型コロナウイルス感染症による差別」です。聴いてください。

【音声】

新型コロナウイルス感染症による差別

松茂中学校 3年

現在、新型コロナウイルス感染症が流行していて、それに伴い、新型コロナウイルス感染症にかかった人や治療に従事された医療関係者、その家族、外国の方や県外の方に対して、ばい菌扱いをし誹謗中傷するなどの差別が社会問題になっています。

新型コロナウイルスは死の危険もあり、まだ分かっていないことが多く、人々はとても恐れています。緊急事態宣言が出され、休校・自粛で人々の行動も制限されました。そして、経済や医療が不安定になり、世の中も一人ひとりの心の中も疲れとストレスがたまった結果、こういう差別が起こったのではないかと思います。

私は、去年「人権を語り合う中学生交流集会」に参加し、学校でも様々な差別やいじめのことを勉強し、絶対に差別やいじめはいけないことだ、もし差別やいじめにであつたら、それを解決する努力をしようと思っていました。しかし、新型コロナウイルスによる差別問題で、自分は誹謗中傷などはしないにしても、「差別」と同じ行動をとってしまったのではないかと思います。

それは、新型コロナウイルス流行地域の県外ナンバーの車を見かけると、新型コロナウイルスが持ち込まれているような気がして、正直来ないでほしいと思ってしまったこと、マスクをしていない人や咳をしている人に冷たい視線を向けてしまったこと、新型コロナウイルスにかかった人の個人情報になり、うわさ話に耳を傾けてしまったこと。これは、大切にしていると思っていた人権や個性を無視した恥ずかしい行動だったのではないかと反省しています。もしマスクをしていない人や咳をしている人がいたら、嫌な態度をとるなどその人を排除せず、安全とその人の権利を踏まえて、どうしたらよいかを考えていきたいです。

5月の下旬に高齢者施設で働いている母が高熱を出しました。時期が時期だけに新型コロナウイルス感染症だつたらと思うと、母の体調も心配でしたが、差別を受けてしまうのではないかと不安になりPCR検査を受けないでほしいと思ってしまいました。幸い、母の高熱はすぐに下がり元気になりました。本当に悪いのは新型コロナウイルスであつて、かかった人ではありません。だから、新型コロナウイルスにかかった人が差別をされるのは本当におかしいことです。もしこの差別を心配してPCR検査をためらう人がいるとしたら、このような状態では新型コロナウイルスには勝つことはできないと思いました。

新型コロナウイルスによる差別は、日本だけでなく世界中で起こっているようです。アメリカのトランプ大統領も新型コロナウイルスを『中国ウイルス』とくり返し呼ぶなど、いろいろな国でアジアの人々に対する外国人差別が広がり、暴行を受けることや人種差別的な扱いを受けることがあつたとニュースで知りました。

差別をなくし人権を守ることが、世界のコロナ危機を乗り切ることにつながっていくと思います。コロナ危機の中で、私たちは差別だけでなく、多くの医療従事者の人々の優しさや温かさに触れる場面もたくさんあつたことを知っています。人々が互いに思いやり、みんなで協力して、新型コロナウイルス感染症と戦っていくべきだと思います。

《コーディネーター A》

本心を語り合う人権学習というのは、本当に見事に子どもたちを変えていきます。そんな学びの場を本当に積み上げていきたい、それがやっぱり私たちの願いです。

時間がありませんので、お一人かお二人、意見をいただけたらと思います。いかがでしょうか。せっかくDさんがしゃべりましたので、中学1年の時の担任の先生、お願いします。(会場内に明るい笑いが起こる)前に出てきてください。全国同和教育研究会の前日の公開授業をするんですが、その時に、どうして、私のクラスが授業をしないのかと、Dさんが言っていたのを思い出しました。はい、お願いします。

《フロア F》

私はDさんを(板野中学校の)1年生の時に担任させてもらいました。先ほどのDさんのお話の中に「私は『ひとごと』だったと思う。」と言っていたように思いますが、全然そんなことはなく、発言した人のどの意見にも真剣に向き合い、自分なりの思いを、素直な言葉で返していく姿がいつもありました。話し合いをつなげてくれる存在でした。私自身もDさんの意見で、深く考えさせられたり、気づかされたりしました。

今日のDさんの話を聞いていると、中学校の時のDさんの姿が重なりました。思いが素直な言葉で語られ、心の中にすーっと入ってくる感じです。

当時、私が心の中で思っている言いよんどんでしまうようことでも、クラスの友達にひるまず正面から自分の言いたいことをはっきりと伝えていました。これを言ったらかわいそうという上から目線の態度ではなく、仲間とは対等でいたいから、自分が嫌われてしまうかもしれないとしても知らん顔をせず、思いを伝える。こういうDさんの姿に周りの子たちも、今まで以上に真剣に自分の姿を見つめていたように思います。

私はDさんの学年を1年、2年、3年と担任させてもらい、全体学習、同和問題学習をする、生活ノートで毎日生徒と話す。こういうを通して生徒たちと一緒に、自分の心と向き合う時間を多く持てることができました。同和問題学習で自分自身が変わっていくのを感じました。

「自分を語っていくことで自分が変わっていく」という話がありましたが、語れるというのはそれを受け止めてくれる雰囲気がないと語れません。自分の弱い部分、だめな部分も私なりのつたない言い方でも、少しずつ語っていくことで、生活ノートに返してくれたり、真剣に耳を傾けてくれるようになったのもあるかもしれませんが、それは聞いてくれる人に柔かい、寄り添おうとする心があればこそだと思います。

当初、私には自分の中に確固たるものがないし、同和問題学習の指導者として生徒の前に立つのが本当に不安で、こういう授業はみんなA先生がやってくれた方が生徒たちにはずっといいのではないかと思っていました。でも、自分の問題として同和問題をとらえ、苦しみながら悩みながらも生徒たちに自分を語る同僚の姿や、仲間の発言に答えようと勇気を振り絞って発言する生徒たちの姿に全体学習で触れるにつれ、これは生徒たちの意見を引き出すための時間ではなく、自分の心を見つめるための学習であることがわかりました。生徒たちをどうこうするというよりも、私が変わるために、強くなるために同和問題とどう向き合うかを考えさせてもらった3年間だったように思います。

こうお話しさせてもらっている今も、皆様にはよくわからないなあと思われる話し方になっているんだろうなと思います。当時も同じで、こんな話し方の私のことを生徒たちはよく聞いてくれたなと感謝の気持ちが湧いてきます。

板野中学校の同和問題学習に出会うまで、自分自身のことはほとんどしゃべらず、心にもずっと蓋をして、うわべで接してきたような私でしたが、同和問題学習に向き合っ、人前で、生徒の前で、「先生なんだから」などとかっこをつけなくていいんだ、素の自分でいいんだと思えるようになりました。

今も新しい職場に行くと、素の自分で接して、私はこういう感じの人間です、ということをしつづつ周りの人と関わって伝えるようにしています。もちろん職場にはご自身のプライベートなことには触れない方もいらっしやいますが、そういう方ともつながれる瞬間というか、心が近づいたと思える瞬間が点、点とあって、それはそれで素敵なことかなと思っています。

自分が清々しく生きられて、失敗も多かったけど、私の人生、結構楽しかったなと思える生き方をしたいなと思います。

いつも支離滅裂でポイントずれの話をしてしまうのですが、Dさんが遠いところから駆けつけて話してくれたことに、少しでも答えたくてつたない言葉でしたが話をさせてもらいました。

《コーディネーター A》

どうもありがとうございました。後お一人くらいなんですけど、(会場を見まわしながら)はい、どうぞ。

《フロア G》

貴重なお時間をいただきありがとうございます。三重県の四日市というところから参りました、Gといます。なぜ三重県から来てここでしゃべっているかと言いますと、2年前にもこの人権フォーラムに参加させていただいて、去年は、中学生交流集會に参加をさせていただきました。

その姿を見た時に、しゃべる、語り合うという場を、私は三重県の小学校に勤務しているんですが、その子どもたちの場にも行ってみたいと思って、参加をさせてもらったんです。今年の1学期、三重県も新型コロナウイルス感染症の影響で大変だったんですが、5月にそれぞれの学年で学習してきたことを、まとめて誰か子どもたちにしゃべってもらおうということを計画しました。

それで、4年生の子どもたちが4人作文を発表したんですが、その4年生の子どもたちはどんな子どもたちだったかと言いますと、3年生の時に、クラスから飛び出して、授業を受けられないという子が4人いました。その4人のうちの2人の子が、4年生になってその時のことを書きました。

1人の子は、「俺は嫌われている」という題名の作文でした。すぐに死ねとか、殺すぞとか、そういう暴言を吐きまくっている子なんですけど、その子が、本当はこの言葉は使いたくないんだという内容の作文を書いていました。そのことを読み合ったクラスの子どもたちが話し合いをして、その言葉を言わせていたのは、自分たちだったのではないかと気がついたという作文を書きました。その作文を読み返すというやり取りをしました。

もう1人は女の子の作文なんですけど、女の子も授業中に飛び出していく、逃げ出していく。それは何なのかと言ったら、勉強がわからないんだということを言えないんです。わからないということを知ったら、教えてあげられたと作文で書いてくれた子がいました。4年生になってもその子は相変わらず逃げ出そうとするんですが、しっかり声を出して、戻ってきて一緒に勉強するというのを繰り返すようになってきたんです。そんなクラスにもなったんです。

そんなことを発表してもらいました。問題はその後なんです。出したその作文に対して、果たして子どもたちは何を感じたのかということですが、その時に、6年生の子どもたちが何人か手を挙げて、「一生懸命頑張っている姿に感動しました」とか、「頑張っているなと思いました」とか、そんなことを返してきたんです。非常に一方的なもの言い方だな。これではいかな、どうしたらいいのかなと思っていた時に、ある1年生の子が手を挙げて、発言するようになったんです。

その1年生の男の子は、特別支援学級に在籍している子で、多動性であり、突然大きな声を出したり、走り回ったりとか、そんな動作のある子どもさんです。この子はいったい何を言うんだろうなと思って、マイクを近づけた時に、「自分も大きな声を出してしまうことがあります」ということを言ったんです。自分が「死ね」「殺すぞ」と言ってしまったという子の話聞いて、その1年生の子は、「自分も大きな声を出してしまう時があります。」と聞いたんです。

その言葉を聞いた時に、その子がそんなことを言うということにびっくりしている自分がいました。その時に、その子に返す言葉が必要だとは思いましたが、なかなか返せません。うちの小学校の状態はまだそんな感じです。

それぞれのクラスにそのあと帰ってから、クラス間で、今の言葉についてどうだったのかなということについてはいろいろ出てきたということは聞いています。できたら、みんながホームルームの時に、「だれだれちゃん、あんたはこういうことを言うけど、あんたのことを好きやで…」そういう、その子に対する言葉のやり取りを、ぜひ返すようになってほしいなと思いつつ過ごしているわけです。

私がここでこういう話をさせてもらったのは、中学生交流集會で、まさに子どもたちが自分の思いを本気で語り合うのを見せてもらい、そのことを今、三重県の四日市の町の中で、実現させていこうと思っている感謝の思いを、この場をお借りして述べたいなと思ったので、手を挙げました。ありがとうございました。

(拍手)

《コーディネーター A》

語っていただいた四日市の子どもたちのこと。そこにつながる徳島の中学生交流集会について語っていただいたこと、しっかりとG先生の実践につなげていきたいと思います。今、語っていただいた子どもたちがしっかりと自分の本心を伝えていく小学校での人権学習、それは、かつて、板野中学校の全体学習に連帯して取り組んだ、板野町の小学校での語り合いの人権学習と重なります。本当にありがとうございました。最後パネリストに語ってもらいます。

《パネリスト B》

ありがとうございました。あの当時、こんなことが耳に入ってきました。

「あの学校だからできる。」「あの先生だからできる。」

めちゃくちゃ腹が立ちました。「バカにするなよ」と思いました。「これは板野中学校でないとできないのか。」「A先生でないとできないのか。」そんな思いになりました。自分がどこまでできるのかということはあったんですが、それは置いておいて、「そんなことはないだろう」と当時思いました。

だから、当時、板野中学校を出てからが勝負だろうなとずっと思ってきました。そして、今思うのは、できると。どこの学校でもできる。どの先生でもできると実感として思っています。一緒のことはできません。それぞれのカラーでできると思っています。

「T-over」は、いろんな名称を考えたんですが、やっぱり、差別・被差別が互いに越える。それから、様々な問題を共に越える。talk-over = 「じっくり話し合う」という意味があるんですが、それらの意味をくっつけて、また、「峠を越えて」という意味を込めて、「T-over」という名称を考えました。

これはある種、僕の覚悟と決意です。差別やいじめはなくしたいという思いがまずあります。それだけではなくて、それをなくしていく過程の中で、いろんなお徳感があるということもぜひ知っていただきたい。例えば、それをしていく中で、自分のことを大切に思えるようになっていく傾向がある。人のことを大切に思えるようになっていく傾向がある。伝えることの大切さ、人とつながることの大切さ、そんなことが実感としてわかっていく傾向もある。そういうお徳感みたいなものもわかってきました。

(フォーラムのチラシを手に持ち掲げながら)このチラシに「学力が上がる」「人とかかわる仕事に就く割合が高まる」と書いています。感覚的に本当にそう思います。なぜかと言われるとまだうまく答えられないんですが、安心して勉強ができる感があるから、自分が教室で認められている感があるから、それがわかった時に勉強ができるというのがあるような気がします。それが結果として、学力が上がるということにつながるだろうし、卒業生の動向を見ていると、人とかかわることが好きな子が多いような気がするんです。それはこれからの社会ですごく大事なことだと思います。

ちょっと大げさなことを言いますが、私はみんなで語り合う人権学習、全体学習を通して「社会を変えたい」「日本を変えたい」「世界を変えたい」という思いがあります。共に取り組んでいってもらえる仲間がいないと、それは無理なんですけれども、アクションを起こし、立ち上げ、これから活動していこうと思っていますので、これからもよろしくお願いします。

《コーディネーター A》

最後です。お願いします。

《パネリスト D》

中学1年生の担任だったF先生が話してくださったんですけど、私が1年生の時に、先生がみんなの前で

泣きながら自分のことを話してくださって、それが今も心に残っています。(当時への思いがあふれ涙ぐみながら)だからそれが今も私の支えとなっているように、先生が本気で自分の思いを私たちにさらけ出してくれたことは、生徒には残っていると思うので、それはとても大きなことだったと思います。

中学生の時には、高校受験がありますので、わからないことをわからないと言える、自分をさらけ出せる場があり、みんなが答えてくれて、みんなが誰も見捨てないぞというすごい空気があったので、みんなで頑張って高校に行こうやという、行きたいところに絶対に行こうみたいな感じで思っていたのを、今日思い出して、そういう仲間の中で助けられて今の自分があると思っています。以上です。

《コーディネーター A》

はい、ありがとうございました。拍手しましょうか。(拍手)時間が来ましたので終わりにします。(力を込めて)社会教育においてもそうです。本当に信頼と尊敬の絆の中で、自分自身のことが安心して言える。それを聞く。それに返していける。そんなつながりの中で私たちは変わっていくんだと思います。そんな人権教育の営みをしっかりと積み上げていきたいなと思います。

(表情をやわらげ)本当に2時間という時間はあっという間でした。本当に一生懸命聞いていただいて、思いを返していただいて、ありがとうございました。以上で終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。終わります。(壇上の3人が礼をし、会場から大きな拍手)

終了

《参加者の意見・感想》

◎自分の人生が大きく変わったのが中2の時です。その時に何があったかという、A先生が、私がいた中学校に転勤され、それが出会いとなりました。

その出会いと同時にやってきたのが「人権学習」「語り合いの学習」です。人権学習の時間が大幅に増加しました。

学年全体の仲間と、みんなが一つになってその本心を語っていく「語り合いの学習」。最初はきれいごとを並べるだけの学習だと思っていました。回数を重ねるにつれ、本音で自分自身のことを語る仲間がどんどん増えていきました。それは、A先生自身が、自分自身のことを本音で、そして本気で私たちにぶつけてくれたからです。

そして私も「語り合いの学習に参加したい」と強く思い、忘れもしない中2の冬に自分自身のことを学年全体に語りました。その内容は、自分が小学校1年生の時に、突然母が記憶喪失になり、私を見たときの母の第一声が「僕、誰?」と言われ、辛い思いをしたという内容です。

聞く人によれば、「話さなくてもいい。話さなくても生きていける。」と思うかもしれませんが、話すことによって自分の気持ちが楽になるし、周りの仲間も「わがこと」として聞いてくれるから、話した後は励ましの言葉もたくさんくれて「みんなに語って良かった」と思えたのです。

中3からは、自分の人生を変えてくれたA先生のように、「人の人生を良い方向に変えられる人間になりたい」と思い、教師という仕事に憧れを抱くようになりました。自分は決して頭がよかったわけではありません。高校では鳴門高校、大学では四国大学に進学し、努力を積み重ねてきました。そして今現在は、小学校5年生を前にして授業をしています。

松茂中学校の3年生の生徒が書いた「新型コロナウイルス感染症による差別」の作文を読ませてもらいました。今現在、身近で起こっているコロナ差別をテーマにし、自分自身の実体験も書かれた文章にとっても感動し、クラスの子どもたちに読んでもらいました。

この作文を書いた子のような考えができる人が1人でも多く増えていかなければ、このコロナによる差別はなくならないので、私自身もこの考えを広げていきます。(20代男性)

◎人権学習においてだけでなく、特に今のこの世の中を生きる子どもたち、人々にとって「本音で語る」ということは本当に大事だと思います。今このネットが大きく普及した世の中で、みんなが多くのことを「ひとごと」としてしか見れなく感じられなくなっているように思います。

ネット上での過激な中傷はとまらず、それによって命を絶つ人がいるのに、それさえ「ひとごと」にしか思っていない人々。非常に悲しいです。正直、人権学習、同和教育について僕自身「ひとごと」としか考えていなかったことを今だから分かるし、本音として言えます。

本音では「自分とは関係ないし、面倒くさい。どうでもええやんそんな。教えんかったらみんな知らんで消えていくやろ」としか思っていなかったんです。こんなやつもこのフォーラムにやってきます。もっとみんなで言い合えたらいいなと思いました。もう少し時間がほしかった。一歩が出なかった。(20代男性)

◎人権問題について改めて考えることができ、理解が深まりました。この会に参加することができて本当に良かったと思っています。(20代女性)

◎パネリストの方や参加者の話をきくなかで共感できる部分、理解できる部分が多かった。(30代女性)

◎行事の開催が厳しい中、このようなフォーラムを実施してくださった鳴門市の関係者の皆様の熱意に感謝の意を表します。(30代男性)

◎三重県から来られた先生のお話が印象に残りました。(30代女性)

◎本音で話すことの大切さ、またそれを聞いたうえで丸ごとその人を受け入れるということがとても素敵なことだと思いました。

できることから少しずつ『わがこと』として行っていきたいと感じました。(40代女性)

◎新型コロナの対策も十分で、すばらしい運営だったと思います。ありがとうございます。(40代男性)

◎久々にフォーラムに参加させていただきました。本音で語る人権学習、人と人とのつながり出合いのすばらしさを改めて感じることができました。

人の語りを聴きながら自分が歩んできた道をふり返っていました。本当に貴重な時間になったと思います。このような機会を作ってくださいありがとうございます。(50代男性)

◎コロナ禍の中これだけの多くの人が集まって一緒に考えているということが素晴らしいと思う。業務の都合で少ししか参加できず残念ですが、最初の中学生の子どもの素直な声に心を打たれました。研修の機会を作ってくださいありがとうございます。(50代女性)

◎自分の思いを発表し、それを受けとめてくれる仲間がいるという関係を築くことが人権教育の基本だと思った。(60代男性)

◎コロナでたいへんな時にもこうやってフォーラムを開いてくださることありがたく思います。たくさんのご配慮ご準備に敬意を表したいと思います。毎年学ばせていただいています。これからも続けてください。本日はありがとうございます。(60代女性)